

## /// 奄美における伝承的「名ツケ」「コトワザ」「ナゾナゾ」とその周辺 ///

Traditional Naming, Proverbs, Riddles of Amami Islands, and their Surroundship

//////////////////// 小 川 学 夫 //////////////////////////////////

### 【要 旨】

「名ツケ」「コトワザ」「ナゾナゾ」は口承文学の範疇に入るものである。まず、口承文学の存在意義と、命名などが口承文学のなかにどう位置付けられるかを示した。ついで、それぞれの分野において奄美の例を提示するとともに、その民俗学的背景と文学的な面（発想と表現形態）についても言及した。それらは、比喩、韻律、踏韻、対句など文学的レトリックも含み、写実性、誇張性、呪術性、批判精神等々を有した民衆が創造し、受容してきた一種の文学作品であることを確認した。

### 【目 次】

はじめに

1. 口承文学としての「名ツケ」「コトワザ」「ナゾナゾ」
2. 名ツケについて
3. コトワザについて
4. ナゾナゾについて

まとめ

### 【本 文】

#### はじめに

奄美諸島に伝えられてきた名ツケ法とコトワザ、ナゾナゾについて、その伝承状況を概観するとともに、民俗性、文学性の視点から若干の考察を試みたい。

名ツケ、コトワザ、ナゾナゾのそれぞれは、今日、口承文学（ないし口頭文学）に属するジャンルと認知されているものである。しかし、奄美に関してこれまでの研究状況をみると、いくらかの貴重な採集例を蓄積してきたことは確かだが、まだ系統的な研究までにはいたっていないといつてよいと思う。本論は、その入り口にたった、ささやかな研究の試みである。

ことわり 以下、名前、コトワザ、ナゾナゾ、民謡歌詞の引用に当たって、諸文献を参考にしたが、原則的に、原文を全てひらがなにし、（ ）内に共通語訳を示した。共通語訳は採集

者の考えを尊重したが、最終的には小川が責を負うものである。

### 1. 口承文学としての「名ツケ」「コトワザ」「ナゾナゾ」

先ず、「口承文学」については、考えを述べておかなければならない。なぜなら、「口承文学」それ自体が果たして存在し得るのかという問題が出てくるからである。

日本語の「文学」に該当する英語の LITERATURE の LITERA は「文字」の意味を持つとされ（註1）、「書く」と文学とが密接に繋がっていることを示している。ところが、日本のほとんどの辞書は「文学」を「言語表現による芸術作品」（註2）としており、「書くこと」を「文学」の必須条件とはしていない。なお、「口承文学」ないし「口承文芸」の項目もあって、はっきりと存在を認めていることも事実である。私もこれに従う立場だが、これはただ無批判的にそうするのではなく「口承文学」が豊かな文学性を有しているからに他ならない。

承知のように、「口承文学」と対置されるものに「書承文学」がある。これだけ文学が進歩、発展をみせたのには書くことがあったからであるが、しかし、文学性においては両者の上下関係はないというのが私の考えである。いいかたを換えれば、口承には口承の、書承には書承のそれぞれ特有の特徴があって、両者の質の上下を比較することは、音楽と絵画を比較するくらいに乱暴な点があることを考えなければならないのである。

とは、いいながら「口承文学」のほとんどの作品は、人を芸術的な意図をもって感動させようとして生まれたものではないこともはっきり認めなければならない。目的は明らかに「芸術」とは離れたところにあって、結果的にそれが「芸術性」豊かな、かつ「文学性」に富んだ作品になっているということなのである。この点を明確に提示したのが、わが国古代歌謡の泰斗、土橋寛の「純粹芸術」「限界芸術」という概念であった。前者は「美的価値を直接の目的として生産され、それ自身で完結した世界をなすもの」、後者は「他の目的をもって生産された非完結的な制作物」というのがそれぞれの定義であるが、いずれにせよ「美的経験を与えるものは、やはり芸術として見る事が可能」であるというのが土橋の見方である（註3）。

残る問題は、どこまでが日常言語であり、どこからが「文学」というべきかということである。もちろん、口から発せられた言葉が全てが文学であるはずはない。私自身、まだ明確な定義はし得ないが、「何らかの表現形態をもって、人の心意に影響を与えるもの」とっておきたい。

日本の口承文学研究は、もともと民俗学の一分野として始まったとされる。したがって本稿では当然、それぞれの作品（こう呼ぶことに違和感を持つ人が多いと思うが、あえてこう呼んでおく）の民俗的な背景を述べながらも、その「文学的形態」についても言及するつもりである。

ついで、名ツケ、コトワザ、ナゾナゾが口承文学の中でどう位置付けられているのかを知るために、私の奄美口承文学分類試案を示しておきたい。完全なものというつもりはないが、1つの目安にはなと思う。

一級分類としては、次の3つに分ける。

唱え言的なもの

歌謡（うた）

説話（はなし）

の「唱え言的なもの」には、「唱え言」そのものも入れるが、「歌謡」ともいえず、さりとて「説話」ともいえない、性格上最も「唱え言」に近い「名ツケ」「コトワザ」「ナゾナゾ」などを入れる。なお、「唱え言」には「呪文」「呪詞」などという言葉があり、それぞれ研究家によって多様な意味をもって使われているが、私は今は「トナエゴト」という言葉を使っておきたい。

の「歌謡」には、奄美、沖縄でユタ、ノロなどといわれる職能的宗教者が伝えてきた「神歌」（神謡と呼ぶ人も多い）、子ども社会のなかで歌われてきた「童歌」、そして一般民衆が伝えてきた「民謡」を入れる。

の「説話」は、「民話」ともいってよいものだが、これには「神話」（「民間神話」といわれることもある）「伝説」「昔話」「うわさ話」を該当させる。

以上が私の分類案であるが、いかなる分類案にもいえることだが、1作品が1分野の中に完璧に当てはまるというものではない。例えば、「トナエゴト」のある種のもは「神歌」や「童歌」や「民謡」で歌われるものも少なくはないし、また「神歌」と「神話」とは、1つのものである場合が多いのである。周知のように「コトワザ」が「民謡」で歌われている例もかなりみられる。したがって、この分類案はあくまで大雑把な1つの基準にとどまることは認めざるを得ないのである。

改めていうこととなるが、ここに扱う「名ツケ」「コトワザ」「ナゾナゾ」は一級分類「唱え言的なもの」に属する分野である。

以下、「名ツケ」「コトワザ」「ナゾナゾ」の順にみていくこととする。

## 2. 名ツケについて

名ツケは、名のあるもの全てにわたるものといってよく、全体像を網羅的に示すことすら不可能である。ここでは、比較的奄美的特徴がみられる伝統的な人名と、あざ名（ニックネーム）に範囲を絞って紹介し、論をすすめる。

### 〔人名〕

わが国において、人の名前に文学性を認めた1人は、寿岳晶子である。「名前は世界で一番短い文学作品だといわれる」とその著書『日本人の名前』（註4）のなかでいっている。確かに、1人の子どもの名付けのために要するエネルギーは、短歌、俳句を1首、短編小説を1編創作するに劣らないものだろうし、付けられたあと、やがて1人だちしていく名前の、人々の心意に作用する影響もけっして小さなものではない。

ここで、奄美の人の名ツケに話を変えると、一応、戦前くらいまで、「ワラビナ（童名）」が付けられることが多かった。一方、本土風の名前も付けられ、戸籍に登録されるのはこちらの方であった。

与論島の場合、栄喜久元著『与論島の民俗』（註5）によると、「ワラビナ」を「ヤーナ（家名）」「シマナー（島名）」などと呼び、本土風の名前を「ヤマトゥナー（本土名）」「ガクコーナ（学校名）」などと呼んだようである。この命名自体も面白いが、奄美的な特徴を持った名はもちろん「ワラビナ」のほうである。同著より例をあげる。

男の子だけの名前 ヤマ（山？）、トク、マサ、ハニ（金？）、ダキ、ジャー、トラ、タラ、

## マニユ

女の子だけの名前 ウト、ムウチャ、マゲ、クル、タマ、ウンダ  
 男女共通の名前 マチ（火?）、ウシ（牛?）、カミ（亀?）、ナビ（鍋?）、  
 ハナ（花?）、ハマル、チュー

「ハナ」を除いては、それほど美しい言葉の名前がないことに注目しておきたい。「ハニ（金）」とあるのも、奄美では「黄金」というイメージではなくむしろ鉄類を指していると見たほうがよさそうである。なお、登山修著『奄美民俗雑話』（註6）には、「クスグウ（糞垂れ）」とか「ムレッジウ（乞食）」といった、今日の常識では考えられないような卑名が童名として付けられていたことが述べられている。

また、童名にも本土の影響がないわけではなかった。本土で逆子で生まれた子につける「ケサ」系の名や、男の子を望んでいたのに女の子が生まれた場合に付ける「アグリ」系の名を奄美でもときおり聞くことがある。

以上で、奄美の伝統的な名前は、美しいものよりは強いもの、ときには汚いものすら選ばれることが分かった。強いものを名前に付けることは今でも、「勝男」とか「鉄太郎」などという名前付けられていることから、誰も理解がいく。しかし、きれいな名前が選ばれず、むしろ汚い名前が選ばれるというのは、現代の人々には想像もつかないことである。

ところが、世界の命名法を調べてみると、このことは決して非常識でも、特殊状態でもないのである（註7）。多くの民族の間では、名前は生まれた子の分身とも考えられていた。同時に、子どもが悪霊に魅入られるのを何よりも恐れた。従がって、魅入られるような美しい名前を付けることは避けられ、かえって悪霊も避けるような汚い名前を付けた例がいくつもみられるのである。日本の古代ももちろんそうである。そうした意味で、奄美の人名の名づけ方は、最も古代的な要素を有しているといえるかもしれない。

これに関連して、つい近年まで、奄美で生まれたばかりの子どもを見たり、抱いたりするとき、その人はけっして「かなしゃんくわ（可愛い子ども）」とはいわなかったものである。表情、動作、抑揚は優しげにしながら「はごさんくわ（憎い子）」「やしゅくわ（汚い子）」といってあやすのである。私自身、1960年代に実際にこの情景を見ているが、これも悪い霊に取りつかれないようにという心である。もっと具体的に、実際に生まれたばかりの子の額に鍋墨を塗って醜くしたところもあるという（註8）。

ただ、近年の奄美ではこの風習は皆無に近いものとなり、命名にしても、本土の命名傾向（例えば女の子に、「子」の付く名前が少なくなったことなど）と全く同じになっているということは断っておかなければならない。

さて、伝統的な名付け方法の奄美的特徴については理解できたが、名前そのものの必要性、重要性についてはどうだったのだろうか。

例えば、与論島では生まれた日に童名が付けられ、7日目に戸籍に登録される正式名が付けられたというが（註9）、子どもの身を守るためにも、いち早く名前をつけておくことは重要だったと考えられる。

ここで、名前を欲しがって、神から名前を貰う神の子の話があるのであげておきたい（註10）。

それは、神の子が太陽神の命で島を作り、人を生ませ、稲をこの世にもたらした話を延々と歌う沖永良部島伝承の神歌「島建てシンゴ」の冒頭部分に出てくるものである。このとき、神の子は、「国クブダ・島クブダ」という名前を貰って、やっと神としての力を獲得するのである。この神話は、名前がきわめて重要なものだったことを教えてくれるのではないだろうか。

#### [あざ名]

あざ名もいろいろな付け方があったことはいうまでもないが、ここでは恵原義盛著『奄美方言散歩』（註10）より、奄美大島の動物名から付いたあざ名に絞って紹介しておく。発想の妙という点では、人名よりはるかに多様性がある興味あるものである。

むしりばと（蜚り鳩）＝羽が蜚られた鳩のように肋骨が目立つ人。

いんぬはぎ（犬の足）＝犬のようにあちこち歩き回っている人のことをいう。「犬も歩けば棒にあたる」の古い意味は、「やたら歩くと災難に遭う」ことだというのが、このあざ名もつけていい意味でいっているのではない。

いきゅんめまゆ（あじさしの目眉）＝あじさは水鳥の総称で、きれいな目眉をしている。くっきりした目眉の美女をこういっている。

ししんめ（獣の目）＝「シシ」は獣類の総称として奄美では今もよく使われている。獣は一般に夜中も目をららんとして何かを漁っているというイメージだろうか、夜遅くまで寝ないで目を輝かせている人をいうのである。

かぜひら（くつわむし）＝歌などにうつつを抜かして、あまり働かない人。

こんみゃとしがた（ごきぶり姿）＝表面的にいい格好をしながら、中身、実力がついていない人。ごきぶりは見る人がみると気持ち悪い虫だが、奄美ではきれいな姿と見ていたことになる。

やちゃ（かわはぎ）＝この魚は、実際には美味な部分があるが、皮が厚いため煮ても焼いても食えないとされる。それで、煮ても焼いても食えないような男をこういう。民謡に「やちゃ坊節」というのがあるが、その主人公「やちゃ」がそうである。

やぬしんがん（家の隅の蟹）＝家に引きこもって外に出るのを嫌がる人。昔は部屋の中に入ってきて隅に潜み、なかなか出ていかない蟹がいたという。

#### [名ツケの発想と表現]

以上、人名とあざ名について、いくつかの事例をあげてみたが、命名における発想、表現の特徴を整理しておく。このことに付いては、すでに言語学者の藤原与一氏が論考（註12）の中で、

- (1) 想の自在性
- (2) 批評意識
- (3) 遊戯性
- (4) 比喻
- (5) 直写直叙
- (6) 滑稽感
- (7) 信仰・敬虔・丁寧

の7つの特徴を挙げている。特にあざ名のつけ方をみた場合、いくつかの特徴が見事に表われていることに気づく。

- (1) の「想の自在性」という意味では、 から までの全てが当てはまるといってよい。
- (2) の批評意識が最も顕著に現れているのは のケースである。 の働かない者を「くつわむし」に例えたのは「イソップ物語」の「アリとキリギリス」の話を髣髴させるであろう。
- (3) の遊戯性と(6) 滑稽感は多分に繋がるものだが、 の歩き回る人を「犬の足」といったり、出不精の人を「隅の蟹」などという表現はわれわれの笑いを誘わずにはおかない。
- (4) については、ここにあげたものは例外なく比喻による命名である。
- (5) の「直写直叙」に当てはまるものはここにはあげられていない。比喻は直叙ではないからである。しかし、「直写」という意味では、 の「羽を雀られた鳩」というのがきわめてリアリティを持っているといえよう。

「直写直叙」型のあだ名をあえてあげるとすれば、手を失った人を「ていきれちゅ」（手の切れた人）というようなものである。

- (7) の「信仰・敬虔・丁寧」については、私はこの中の「信仰」を「呪術性」ないし「言霊信仰」といいかえ、独立させることを提唱しておきたい。言霊に頼るということは「願望表現」と強く結びついているということであり、表現の根元的欲求ともいえるからである。本稿では以下にもこの言葉を何回も使うことになるが、特に、最初にあげた人の名のつけ方に密接に関係してくる。

奄美の伝統的な人名の場合、美しいものより、強いもの、頑丈なもの、ときに汚い名前をつける傾向すらあったことを思えば、このことが十分納得いくはずである。

## 2. コトワザについて

### [各地のコトワザ]

奄美のコトワザは、各島各地域に豊富に残されていて採集されたものも多い。このコトワザのことを「タトエ（例え）」ということが多いが（註13）、表現上全てに例え（比喻）が使われるとは限らず、直接的に命令したり、指摘する形のものもないわけではない。奄美でコトワザと例えとが結びついたのは、「例え」で人を教えに導くという意識が強くあったからであろう。そのため、本土でいうコトワザの意味と範疇とは少しづれがあると考えなければならない。ここでは、広い意味のコトワザを扱う。

奄美で伝承されてきたコトワザのなかには、南国の風土以外では生まれ得ないものもあるし、



言葉だけはシマグチ（島の方言）だが、本土の改変版といってもよいようなものも少なくはない。

前者の例でいえば、「はぶあたいは ものしらせ（ハブ 毒蛇 に噛まれるのは 神のもの知らせ）」がそれだし、後者の例では、「きょうでや たにんのはじまり（兄弟は他人のはじまり）」などである（註14）。

コトワザの目的や、内容面での分類についてはいくつか知られているが、大藤時彦が示した次の分類（註15）が知られたものの1つである。

- （1）攻撃的諺
- （2）経験的諺
- （3）教訓的諺
- （4）遊戯的諺

私もおおよそこれに従って、なるべく奄美のコトワザとしてオリジナリ性をもったものを例示していくこととしたい（註16）。

- （1）相手に対し攻撃的、批判的な意味を込めたコトワザ

なまむぬしりや うーきでいぬ むとう（生半可な物知りは 大傷のもと）＊奄美大島

うやんばちや たちまち（親に対する罰は たちまちに当たる）＊奄美大島

ゆうはらむんぬ たちやがい（中身のない人間ほど 頭を持ち上げて偉そうに歩く）＊徳之島

うなぐぬにじゅうごや かまった かんびゅむん（女の25で嫁に行かないものは 鍋蓋を被せられる）＊徳之島

しるぬさんしるや ねずみちゅんま きかむん（昼弾く三味線は 鼠でさえ 聞かない）＊徳之島

この範疇のコトワザは（2）の教訓的なコトワザに重なる。例えば の場合、日ごろ物知りぶりを自慢しているような人に発せられたときには、明らかに攻撃、批判以外のなにものでもないが、一般には誰にも通じる教訓となるのである。

- （2）経験を教えるコトワザ

ぐわんたんな ほうきや すいんな（元旦は 箒を使う掃除は するな）＊奄美大島

ちゅゆねぬう むいんせや ななゆる（一夜の 寝不足は 回復に七夜かかる）＊同上

かねからさば むんかまちいみりい(人にお金を貸そうというときは 物を食べさせてみなさい 食べ物を大切にしているかどうか分かるから ) \* 奄美大島

うんぬくえていか あぎぬやせゆむん(海の漁のよい年は 陸の作物の出来が悪い) \* 徳之島

えーま うしとおし(痩せ馬 牛を倒す) 旧の2月はそれほど寒い北風が吹く \* 同上

このうち純粹に、自分たちの経験を他者に伝えたり、お互い確認し合うのは くらいであろう。 は(1)の攻撃、批判、(3)の教訓になりうるものである。

### (3) 教訓的なコトワザ

くとうばんにゃ じんかねいや いらん(どんな言葉を使っても 銭金は いらぬ 相手を思った言葉を使おう) \* 奄美大島

いちやさらば さますい ねたさらば くうねれい(熱いものは 冷ませ 腹立つときは 堪えよ) \* 同上

かなしゃんくわんにゃ ういやちよ(可愛い子には 大きな灸を) \* 同上

うやうがでい かみうがめ(先祖を拝んでから 神を拝め) \* 徳之島

くがねで あしばすな(黄金の手を 遊ばしておくな) \* 同上

特に は(1)の範疇のコトワザにもなりうる。しかし、かかるコトワザが、奄美でも最もコトワザらしいコトワザと意識されていることは確かであろう。

### (4) 内容よりも言葉遊びに中心がおかれたコトワザ

やまうーば いしよむいすいか(山へ獺に行くときは大法螺を、磯に漁に行くときは目配せで) \* 奄美大島

あとなりむんぬ みすだるかぶり(後に来たものの 味噌樽担ぎ だから引越し手伝いなどは遅れないようにしよう) \* 同上

あまんざり(やどかり切り その袂で髪を切ったように粗末な散髪) \* 徳之島

ふうばる ふうみ(広い野原には 大きな目がある どんなところでも見ている人がいるのだから、盗みはするな) \* 同上



などは、そのような風習があったのかもしれないが、一般の人にとっては山の獺はあまりやりつけないことであり、大法螺が嘘になってもあまり咎める人もなかったのであろう。それに対して海の漁は日常的なものであるから、そこそこに獲れるのがふつうなのである。それにしても、面白さを狙った誇張表現であることには違いない。

などは、明らかに言葉遊び的要素が濃いものである。

以上、19のコトワザをあげてみたが、発想、表現の上でもきわめて多様で、豊かなものを持っていることが認められる。

#### [コトワザの発想と表現形態]

これまでの分類も、発想と表現形態におおいに関わるものだが、あらためて私なりの整理をしておきたい。先行の研究(註17)を参考にしたことはもちろんである。

- (1) 直接表現と比喻表現
- (2) 客観表現と主観表現
- (3) 韻律的短句
- (4) 対句
- (5) 踏韻
- (6) 呪術性

(1) では、の「親の罰はたちまち当たる」、の「元旦は箒を使うな」などのコトワザが直接表現であり、の「昼弾く三味線は鼠も聞かない」やの「痩せ馬 牛を倒す」などは典型的な比喻表現といえる。

中間的なものも存在する。の「後から来たものの 味噌樽担ぎ」などは、大饗なものの比喻として「味噌樽」が出てきたと解するのがふつうだが、実際に「味噌樽担ぎ」をさせられるということもないとは限らないからである。

いずれにせよ、比喻表現はその背景が知らなければ、ナゾナゾのようになってしまうが、文学的表現としてはこちらが勝る傾向にある、と私には考えられる。その比喻も誇張が強ければ強いほど、面白いものになっていく。

(2) 主観表現、客観表現、この2つの表現の差異も注目したい点である。総体的に、命令形(否定命令も含む)によるものは、主観表現であり、そのほかは客観表現といってよい。

その文学性や表現効果については全く上下はないと考えられるが、実は攻撃的、批判的な意味を強く込めるには客観表現の方が効果的だと思われる。

にあげた例を、原文のままに

i) なまのむぬしりや うーきでいぬむとう (生半可な物知りは大傷のもと)  
 というのと、

ii) なまのむぬしりやしんな うーきでいぬむとうなる (生半可な物知りはするな。大傷のもとになる)

を比較すると、どちらが説得力のうえで勝るだろうか。見方は分かれるかもしれないが、私は

(i) に軍配をあげる。

(3) 短句で韻律的であることは、「コトワザ」の最も基本的な形態である。もともと、コトワザの意味が「言の技」であり、相手に対して、何らかの伝達をするには、ただでと長くは「言の技」にならない。韻律の点では、特に定型があるわけでないが、例えば「うやうがでいかみうがめ」のような5・5調はきわめて耳に心地よさを与える。

(4) 対句も少ないとはいえず、人に強い記憶力を持たせる効果的な表現である。 以外にも「ちゅやくくる まうしやちきやら」(人は心 馬牛や力 \*徳之島)など傑作がある。

(5) 踏韻はいわば言葉遊びに含まれるものであるが、文学性を高める1つの要素となっている。の「ふうばる ふうみ」や「なしんちゅーどう なきゅん なさんちゅーや なかん」(子を 生んだ人は 子育てに 泣き、生まない人は 泣かない \*奄美大島)は頭韻であり、「ゆわさどう まあーさ かなしゃどう きゅらさ」(空腹は 美味しく 可愛ければ きれいに見えるもの \*奄美大島)や「あんち いたんな ねえんち くやむいな」(金があるといって 威張るな ないといって 悔やむな \*徳之島)は脚韻である。これらは、偶然にこうなった部分もあるだろうが、多くの場合、これらのコトワザを作った人が意識して効果を狙ったのだといえる。

(6) コトワザの呪術性について考えてみると、奄美にかかわらず何処のコトワザにも、みられるものである。コトワザは、言葉の力を借りて何らかの効果を期待したり、物事を確認することを目的としたものである。いい方を変えれば、コトワザ自体が呪術性の上になりたっているといつてよいのである。

「コトワザ」の「ワザ」を単なる「技」とみるのではなく、「ワザワイ」の「ワザ」と同じ「神の意志」とみなす考え方があがる(註18)、奄美のコトワザをみてもこのことは実感させられる。

の「先祖を拝んで それから神を拝みなさい」などは、島の人々の心に染み入って、これまで想像以上の影響を与えてきたものと思われる。

#### [民謡との関連]

さて、奄美のコトワザを考える際に、考慮すべき点がある。コトワザ自体で成り立って入る場合と、民謡や説話と結びついて表現される場合があるということである。

特に奄美の民謡とコトワザの結びつきはきわめて深い。奄美には「歌半学」という言葉があって「歌を聞いていれば、人生についての学問を半分はしたのも同然だ」という意味であるが、その対象になる文句が教訓歌、つまりコトワザを歌詞化したものなのである。奄美民謡の詩形の大半は8 8 8 6調(琉歌調)であるから、それに則ったコトワザということになる。以下例をあげておく(註19)

こころむちなしや ばしやぬはぬひろさ まつぬはぬせばさ くくるむつな (心を持つならば 芭蕉の葉のような広い心を持ちなさい 松の葉のような狭い 心は持つな)

せけんやまかわや まるきばしごころ かにもあぶねさむ わたていみれば (世間の山川を渡っていくのは 丸木橋を渡るよう こんなにも危ないものだ 渡ってみれば)

はなやればにおい えだぶりやいりゃぬ ひとやきむくくる すがたいやぬ (花ならば匂いが  
大切 枝振りは必要ない 人は肝心が大切 姿はどうでもよい)

この歌詞の元は本土のものである。江戸期の民謡集『山家鳥虫歌』(註21) などに残っている  
次の歌詞の改変版であることは明らかといえよう。

梅は匂よ 桜は花よ 人は心よ 振いらぬ (河内)

8 8 8 6 調歌詞以外にも、コトワザ的歌詞は存在する。

たしまえんや むしぶなよ たしまえんむすべば うとうさんなだ うとうすんどう (余所の  
里の人との縁は 結びなさんな 余所の里の人と縁を結べば 落さなくともよい涙を 落すよ)

いずれにせよ、奄美でこれほど熱心にコトワザ的歌詞が歌われるには理由があった。奄美の歌  
の場は、ふつう歌遊びといわれ若者はもちろんだが老人たちも加わった。そして掛け合いで延々  
と歌が続けられた。この歌遊びの席こそ、長老たちが歌を通して若者を教育する場でもあったの  
である。

#### [説話との関連]

奄美の伝説や昔話のなかで、コトワザが主要なモチーフとなっているものが少なくない。最も  
知られているのは、本土から移入された昔話「話買い」である。ここでいう「話」がコトワザな  
のである。沖永良部島和泊町内城に伝承されている話をあげる (註21)。

「男が妻と母親を家において、供を連れて旅に出る。帰りに「テーチ屋」で「テーチ (ことわ  
ざのこと)」を買う。それは「張った弓やめよ。沸いた湯をさませ」というものだったが、2人  
分で40銭取られ、次の日も同じテーチを買って40銭取られる。家に帰ると妻が坊主と寝ているの  
で、男が弓を張ろうとすると供が止める。テーチを思い出して戸を叩くと頭を剃った母が出てき  
た。妻を守るために男装していたのだった。テーチのおかげでその後も幸せに暮らした」

ことわざの持つ呪術性がそのまま話となったものだといってよい。なお、買ったコトワザがい  
ささか謎めいていて、それが最後になって解き明かされることは、次項に扱う「ナゾナゾ」との  
関連性をも想起させる。

他の地域では3つの「コトワザ」を買うという話が多い (註22)。結論はこの話とほぼ似てい  
るが、それに至るまで2つのコトワザによって自らの命が助かるのである。

そのコトワザとは、「大木より小木」「まのむんかで ゆだんしるな(美味しいものを食べて油断  
するな)」「短気は損気 手を引け」「近道しないで遠道まわれ」「岩に陰あり 紅葉陰あり」「抜  
いた刀は差せ」といったヤマトクトゥバ (本土の言葉) か、ほとんどそれに近いものが多いので  
ある。これらの話とコトワザについては、奄美の独自性はほとんど見当たらないが、この話が奄

美全域に伝承され、非常に親しまれた形跡のあることは、島の人たちが言霊の力を強く信じていたことと無関係ではないと思う。

ところで、コトワザと説話が結びついて語られるものはこれだけではない。

例えば、1つの話をコトワザで締めくくるものもある。ここにあげるのは大島本島、大和村名音地区に伝わる「犬婿入り」の話である（註23）。

「女がヤヒユル様という海から上がった犬と一緒に、山で仲良く暮らしている。あるとき、ひとりの男が来て、犬を射殺し女と一緒に。やがて、7人の子が生まれる。男は気を許して犬を殺したのは自分だといってしまう。すると女は剃刀で男の咽を掻き切り仇を討った。それで『7人の子を生んでも妻に心を許すな』というコトワザがある」

これは、話の締めめにコトワザを持ち出してきた形のものだが、ほかに伝説や昔話自体がコトワザを生んだように伝えるものがある。ここに取り上げるのは、ともに『和泊町誌』（註24）にあるものである。

1つ目は、「とっしゆいとは ごーふって そーじり」（年寄りとは 穴を掘って 相談せよ）というコトワザについての話の概要である。

「昔ある国に『老人は山に捨てよ』という掟があった。1人の親孝行者は老母を捨てるに忍びず、床下に穴を掘って隠しておいた。そのころ、その国に隣国から3つの難題が持ち込まれた。王は案じわずらった挙句、この難題を解いたものには褒美を与えると布告した。すると、親を匿った男は母親の所に行って母に尋ねると、簡単に解いた。すぐにこのことを王様に伝えると、それからこの掟は廃止され、老人を大切にすることになった」

おなじみの「姥捨て」系の話であるが、確かにこの話がなければ、このコトワザの存在は考えられない。

今1つのコトワザは、「あかうししんな」（赤牛するな）または「あかうしのめしんな」（赤牛の目するな）というもので、「子どもは大人の前でいらぬことを話すな」という意味でいわれる。これには次のような話がある。

「薩摩藩支配の時代、耕作用の牛を屠殺することは重罪であったが、ある男が夜中こっそり赤毛の牛を盗んで来て、これを屠って食べた。子どもにはもちろん口止めしてあった。後日、役人が調べに来た。このとき男は、わが子が事実をいいたしかねないので、目を光らせて子どもを睨み付けた。それに驚いた子は、『親父の目は、この間殺した赤牛の目ン玉のように恐ろしい』とだったので、露見し処刑されたということだ」

こちらの方は、もともと「赤牛のような恐ろしい目をするな」といった意味のコトワザがあって、それが話と結びついたと考えられないではない。しかし、「犬の婿入り」の話とコトワザの繋がりに比べたら、これらの話とコトワザの結びつきは固く、リアリティも有しているといえよ

う。

話とコトワザの関連の研究は、コトワザの成立と発展、移動の諸相を知るためにも重要なことといわなければならない。

### 3, ナゾナゾについて

[各地のナゾナゾ]

柳田國男は、ナゾナゾとコトワザとはもともと1つのもので、判じ難くなったコトワザの意味を問うたのがナゾナゾだという意味のことをいっている（註25）。果たして奄美でも、前項のコトワザから

あまんざり ぬーが（やどかり切りとは なーに？） 答え＝やどかりの缺が刈ったような、ような粗雑な散髪

などというナゾナゾが作られないわけではない。しかし奄美では過去に遡ってもコトワザとナゾナゾが同じものだと、意識された時代はなさそうである。

「ナゾナゾ」の「ナゾ」は、「何ぞ」が語源とされているが、奄美では「イッキリムンガタリ（いい切り物語）」とか、「イイキリムン（いい切り物）」などという所がある。ほんの短い物語と意識されていたことはきわめて興味深いことといえよう。

なお、一般的に奄美では、ナゾナゾを始めるについて、特別な形式は見当たらないが、ただ『歴史景観の里 宇検部落郷土誌』（註26）にはナゾナゾ遊びを始めるについての特別な言葉と方法が記されている。

それによると、ナゾナゾを発する人が、先ず「あったくったないか（あの人この人いろいろ問題はないか）」と切り出す。それに対し、答える側は「あしとけーら（大有りだ）」といい、そこでやっと始まるのである。

「ことわざ」や「呪詞」などと比較して採集例は多いといえないが、田畑英勝著『奄美の民俗』（註27）に13種、本田碩孝の報告「奄美のなぞなぞについて」（註28）に83種が載せられている。私自身もわずかながら採集しているが、それらは前掲著書、論文と重複している。

ところで、日本のナゾナゾは大きく二段ナゾと、三段ナゾとに大別される。二段ナゾとは、「 はなーに？」という問いに対して「 」とストレートに答えをいう形のもの。三段ナゾは「 と掛けて何と解く？」「 と解く」「その心は？」「 である」という形のものである。

奄美には伝承的な二段ナゾは存在するが、三段ナゾは今のところ見つかっていない。これは、同じ文化圏に属する沖縄も同じである。そこで以下に示すのは、二段ナゾのみである。（註29）

みじぬといや ながりんばん たまらんむんや ぬーが（水の樋は 流れるのに 水が溜まらないものは なーに？） 答え＝すていつば（蘇鉄の葉）、蘇鉄の葉は一見水を流す樋に見えるが、実際は葉っぱから水が零れて溜まらないことをいっている。＊奄美大島

やんぐしん くるかな ぬーが（家の後ろにいる 黒加那 なーに？） 答え＝わー（豚、島豚は黒豚であったということが前提である。＊奄美大島

どーちしん ゆどまん しろくじゃま ぬーが（ドーといっても 止まらない 白馬 なーに？） 答え＝みじぐるま（水車）

いしん たーどん ぬーが（座れば 高くなるもの なーに？） 答え＝いん（犬）

うらやうがんにいきい わんやかんにいきゅさ ちし ていんなりゆんむん ぬーが（あんたは そっちに行き 私はこっちに行くよ といって 後は 一緒になるもの なーに？） 答え＝帯

やんくし こうぶり ぬーが（家の後ろで 頭を振っているのは なーに？） 答え＝うん（芋）の葉

ぬうにん くういにん わたな はらみやしいが からじなはらみゆん ぬーが（何でも かんでも 腹に 孕みやすいが 頭に孕むのは なーに？） 答え＝蘇鉄，上側に実をつけるから。  
＊徳之島

わぁーしなむん なぁんがちいかゆむん ぬーが（私の品物なのに あなたが使うもの なーに？） 答え＝名前 ＊同上

しゃーやううくわじ ういやゆとゆと いちかぶる ぬーが（下は大火事 上はユトユト 水一杯の表現 いちかぶる 意味不詳 なーんだ？） 答え＝湯沸し釜の鍋蓋 ＊同上

いきやまるうび かえりやひらうび ぬーが（行きは丸帯 帰りは平帯 なーに？） 答え＝うぎ（砂糖きび）圧縮機で絞られる前は丸く，後は平たくなるから。＊同上

#### [ナゾナゾの発想と表現形態]

ナゾナゾの発想と表現形態については，何人かの人が指摘しているように，けっきょくは次の2つの型に集約されるであろう。

同音異義や言葉・文字の組み合わせ（洒落など）の利用

例えや見立て（比喩・擬人法）の利用

ここで，奄美の場合をみると，全てが に当てはまり， のタイプは皆無に近いことは不思議といえは不思議な現象である。同じ文化圏にある沖縄では，多いとはいえないまでも，例えば宮古地域に次のようなナゾナゾがある。（註30）

とうーぬう つーば たーが とうすたすが (10の「つー」は 誰が 取ってしまったか?)  
 答え=いつつ (いつつ)。つまり、「とう (10)」に「ぶていーつ (1つ)」「ふうたーつ (2つ)」  
 のように「つ」が付かないのは、「いつつ (5つ)」が10から「つ」を取って来たせいだ、そのため「つ」が2つもあるというのである。

完全な 型のナゾナゾである。奄美にこの型がないのは、奄美におけるナゾナゾの成熟が遅れたことを示し、ナゾナゾの歴史自体がそれほど古くないことを示しているのではないかと、考えざるを得ない。

とはいえ、奄美のナゾナゾの発想や表現形態をみると、単純とばかりはいえない。一応まとめてみる。(これも先行研究を参考としている。)

- (1) 描写・写生
- (2) 比喩・擬人法
- (3) 常識の逆転
- (4) 滑稽感
- (5) 対句
- (6) 踏韻
- (7) 1人称, 2人称表現

(1) と (2) は上述, 型をいい換えただけのものである。先ず見事な描写, 写生があって、その上にたち比喩, 擬人法が用いられているのである。

このように両者は表裏一体ともいえるが、あえて (1) だけのものを探すと、である。確かに犬が4脚で歩いているときよりは、後脚2本で座ったときのほうが高く見える。ここには比喩的表現は入っていない。

の「頭を振る」が厳密に言えば比喩ではあるが、しかし比喩を感じさせないくらい直写直叙的といえる。

これらを除けば、どれも比喩ないし、擬人化表現をしていることは説明する必要もないであろう。

(3) 常識の逆転をねらったものとして、今あげた がこれに該当するといえはいえよう。常識的にいえば、立つほうが座るより高い。それを逆転させたわけである。 もこれに入れようと思えば入れられる。

(4) 滑稽感を強調したものも多い。 などが該当しよう。

(5) レトリック面での対句の使用という点では、 の「ぬーが」の部分を除けば、「いきやまるうび かえりやひらうび」は完全な対句である。

(6) 踏韻。 の「わあしなむん なぁんがしかゆむん」、 の「いきやまるうび かえりやひらうび」がそうである。

(7) のように、対称物を1人称(わたし)と2人称(あなた)で表現をするものがある。これは本土のナゾナゾにもある型だが、親近感を抱かすのに大きな効果を持つ。



## [三段ナゾ的発想の民謡]

ここで三段ナゾナゾ的発想の民謡をあげておきたい。それはナゾナゾを歌でやりあうというのではなく、三段なぞ的発想を内包した歌のことである。例えば次のような歌詞である。(註31)

かなとわがえんや きしりさをごころ うちやこがれとってい よそやしらぬ (恋人と私の縁は 煙管の竿のころのようなもの 内は焦がれていても 余所は知らない)

これを三段なぞ的にいいかえれば、次のようになる。

1 段目「恋人と私の縁と掛けてなんと解く？」

2 段目「煙管の棹と解く」

「その心は？」

3 段目「中は燃えていても、外には見えない」

歌詞の中に「 のころ (心)」という言葉も出てくることにも注目したい。かつて本土で歌でやりとりされたという三段なぞとの繋がりも、あながち否定できないと私は考えている。

以下、同趣向の歌詞を2首あげておく。

をなぐみぬあわれ いとやなぎごころ かぜにひきやされて なびちいいきゆり (女の身の衰れさは 糸柳のようなもの 風に引かされるままに 靡いて行く)

さむせんぬめづる わらべとじごころ ちめてちめこうるし きれていきゆり (三味線の女孩 一番細い三番線 は、童妻 幼な妻 のようなもの。詰めて、詰め殺して 切れてしまう)

## [ナゾナゾと説話]

なぞなぞが出てくる説話も少なくはない。本土同様、奄美にも難題婿といわれる一群の昔話がある。長者の娘か、その親が男たちになぞなぞを出して、それを解いたものを婿にするという話である。そのなぞは、本土では和歌の形で出される場合があるが、奄美では民謡の歌詞として出されているものがある。奄美大島笠利町佐仁の話者による話 (註33) の概要をあげておく。

「ある村に金持ちの一人娘がいて、美人でもあった。この娘を嫁にし、金持ちの家を継ぐのには、難題を解かなければならなかった。しかし今まで、我こそはと行った誰もが答えることは出来なかった。最後に、貧乏で学問のない青年が行った。このとき、

てんにはなさかし ちにたまきしてい たぁちまにていちくらかけてい しめでいいもれい」  
(天に花を咲かせ 地に玉を着せて 二匹の馬に一つの鞍を掛けて 忍んでいらっしやい)  
という歌の意味を問われた。青年は「天に花を咲かせ」というのは「星空」のこと。「地に玉を着せて」というのは「夜露や朝露をためて光っている草」のこと。「二匹の馬」とは「孕んでい

る馬」のこと。孕み馬は静かに歩くから、夜に静かに忍んでくるようにという例えであると、答えた。それでこの青年は娘をもらい、たちまち金持ちになった」

このほか、奄美にも「姥捨て」や「絵姿女房」系の話があって、そこでなぞなぞめいた難題が出されるが、それらのほとんどは本土移入のものである。それに対して、なぞを込めたこの歌の文句だけは異なる。独自性、かつ文学性において、私には他のどのナゾナゾよりも優れていると思われる。ナゾナゾの文学性も、歌の文句になったときより薰り高きものになった、というべきであろう。

## まとめ

以上、奄美の伝承的な「名ツケ」「コトワザ」「ナゾナゾ」の3つジャンルについて、伝承状況を紹介するとともに、発想や表現形態等について整理し、若干の考察を行ってきた。ともかく研究の入り口に立ったばかりで、用語その他に不統一があったり、語義の確定していない用語を使うなどした謗りは免れないが、問題提起だけはし得たと思っている。

一般には、およそ文学とは遠いところにあると思われる分野である。しかし、つぶさにみていくと、その根元には見事な発想と確たる表現形態が存することが確認できたのである。

なお、調査、採集状況において、ナゾナゾがまだ十分とはいえず、今こそ急がれる時期であることも分かった。

おしまいに、これら3分野の研究は、今後、トナエゴトや民謡や説話研究の進展にも大きく寄与するだろうということも特記しておきたい。

(註)

1. 『ジーニアス英和辞典』の "Literature" の項など参考。
2. 例えば『大辞林』（講談社）には の説明として「[literature] 言語表現による芸術作品。詩歌・小説・戯曲・随筆・評論など。文芸。（後略）」とある。
3. 土橋寛著『古代歌謡の世界』（1968年、塙書房発行）382頁
4. 1990年、大修館書店発行
5. 1964年、自家出版
6. 2000年、春苑堂出版発行
7. 雑誌『言語』1990年3月号は「世界の名づけ」特集で、アイヌほか多くの民族の名づけが紹介されている。それらを参照。
8. 瀬戸内町誌編集委員会編『瀬戸内町誌 民俗編』（1975年、瀬戸内町発行）170頁など。
9. 長澤和俊編『奄美文化誌』（1974年、西日本新聞社発行）の「通過儀礼」の項等参照。
10. 田畑英勝ほか編『南島歌謡大成 奄美篇』（角川書店発行）155～161頁にその詞章が掲載されている。もともと沖永良部島の巫者、ユタが竜神などに祈る神歌。
11. 1987年、海風社発行
12. 『日本民俗学大系10 口承文芸』（1959年、平凡社発行）所収の「命名と造語」の章。

13. 小川自身の聞き取り。
14. とともに松山光秀著『徳之島の民俗 [ 1 ]』（2004年、未来社発行）の「ことわざ」の章より引用。
15. 平凡社版『世界大百科事典』（1972年初版）の「ことわざ」の項参照。
16. 以下にあげたコトワザのうち、奄美大島のものは宇検部落郷土誌編集委員会編『歴史景観の里 宇検部落郷土誌』（1996年、同委員会発行）の「ことわざ」の項より、徳之島のものは註14の著書より引用。
17. 註12の著書の「ことわざ」（大島建彦執筆）の章、『日本民俗文化大系 7 演者と観客』（1984年、小学館発行）の「ことばの民俗 （1）ことわざ」の項など。
18. 註17の著書、347頁
19. 以下の民謡歌詞は、恵原義盛著『奄美の島唄 定型琉歌集』『奄美の島唄 歌詞集』（ともに1987年、海風社発行）より引用。
20. 『新日本古典文学大系62 田植草紙 山家鳥虫歌 鄙廼一曲 琉歌百控』（1997年、岩波書店発行）70頁参照。
21. 『日本昔話通観25 鹿児島』（同朋舎出版発行）134頁。
22. 註21の著書には、奄美関係で4話収載。
23. 註21の著書、307頁。
24. 和泊町誌編集委員会編、1984年、和泊教育委員会発行。
25. 『定本 柳田国男集 第6巻』（1968年、筑摩書房発行）所収の「口承文芸史考」（初版本、1942年、中央公論社発行）、30頁。
26. 註16の著書。
27. 1976年、法政大学出版局発行。
28. 『奄美郷土研究会報 21号』（1981年）に収載。
29. ～ 小川採集（奄美大島、名瀬市有良地区の古老より、1940年代に採集） は註27の著書より、 ～ は註28の論文より引用
30. 柴田武ほか編『世界なぞなぞ大事典』（1984年 大修館書店発行）33頁
31. 以下の民謡の歌詞は、註19の著書より。
32. 田畑英勝著『奄美大島昔話集』（三省堂発行）69頁

（本学教授，研究所長）